

実感の表現としての擬声語・擬態語の頻出が目立つ。それも独特な表現が少なくない。大半は二音節の繰り返しで三三七種を数える。文章全体にリズム感をもたせ、文体に生きのよさを与える重要な条件となっている。その観覧的印象の如実な表現は、奔放な感情の流出を伝えるものである。

(3) 体言止め

言語の象徴性や余情を利用した表現は明らかに短歌の流れをふむものである。艶美な抒情の散文詩的描述には浪漫的趣が漂い、リズム感とスピード感を伴って文体の特色を成している。

(4) その他

かの子は多面的な才媛で中国文学への造詣の深さはよく知らされ

ている。かの子の小説においても脚韻・押韻という技巧を度々用いている。

かの子の選語意識、表現意識の底に、「美」を憧憬して華やぐ生命の深い吐息が聞えてくる。

おわりに

「さくらばないのちいっばいさくからにいのちをかけてわがながめたり」まさにかの子の自然観照をうたいこめた一首である。かの子曼陀羅たる小説はかの子の生命を彫り止めたかの子の生命そのものであり、小説の一文一文、一語一語が持つ響きは、かの子の「美」の世界を形造るものであった。

枕草子にみる清少納言の美意識

— 形容詞からみた美意識 —

二二回生 成 松 や す 子

目 次

一、序

二、本論

第一節 美(醜)の心象語について

第二節 心象語の対象が示すもの

第三節 かきつばた試論

第四節 清少納言の美を形成するもの

三、結び

四、参考文献

一、序

私は、これまで幾度となく、平安の女流文学の双壁である源氏物語と枕草子に接する機会を持った。そして、その度に、上層貴族だけの社会ではあるが平安時代の雅やかな社会風俗、あらゆる生活用式や、それらの作者である紫式部と清少納言との出仕の立場の違い、それぞれに表現される様々の美、美意識について非常に興味を持った。特に枕草子に見られる清少納言の小気味良いまでの評や美観には魅力を感じ、様々の美の表現に関心を持っていた。同時代に生き、同じく後宮の一女房として生活した紫式部と清少納言であるが、この二人の美意識は同一ではないようである。枕草子においては、紫式部とは違う清少納言独自とも言うべき美意識があるように思われる。

そこで、卒論に際して、清少納言の美意識をとりあげ、枕草子の中に様々に表わされた彼女の美意識について考察してみたい。尚、美意識を考察する際には、相反する醜意識をも考慮することが、より明確になるので、これらを並行して考察する。枕草子における清少納言の美意識は、すでに、「をかし」をはじめとして「なまめかし」「きよし」その他の語がとりあげられ精緻な論考がなされている。が、私はここで枕草子における形容詞を主にした美的心象語、醜的心象語を通して、清少納言の美意識、醜意識について私なりの立場で考察してみたい。テキストには、日本古典文学大系本を使用し、引用箇所、段などすべてこれによるものである。(但し、一本は省いた。)

二、本論

第一節、美(醜)的心象語について

形容詞の働きに注目して、枕草子の美意識、醜意識の考察の際に、形容詞をとりあげることにした。その形容詞の数は、枕草子中一二〇語であった。その中から美的心象語、醜的心象語それぞれ二五語について考察した。

美醜の判別に際しては、塚原鉄雄氏の「美的理念―『をかし』其の他」(解釈と鑑賞昭和三九年一月)を参考にした。また一二〇語の中から、五〇語を選出する際には次の二点に留意した。ひとつは、用例の数値である。従って数値の高いものから選んだ。ひとつはものづくしの章段を持つ語である。これは、清少納言が美や醜についてかなり意識的に考えていた語であることを示すものだと考えられるからである。以上の二点に留意し、総合的に考えあわせて五〇語を選出した。

尚、形容詞の心象語と語源を同じくするものは、考察の際に看過できないものとして付属語として考察の対象の中に加えた。心象語との数値、付属語、またそれぞれの上位十位までは全体における割合を次表で示した。

美的心象語										
形容詞	数値	付属語								
あたらし	13									
ありがたし	5	ありがたげなり(1)								
うれし	40	うれしがる(1) うれしげなり(1)								
うつくし	19	うつくしがる(1) うつくしげなり(4)								
うらやまし	13	うらやましがる(1) うらやみ(1) うらやましげなり(3)								
うるはし	19									
おもしろし	12	おもしろし(1)								
かしこし	32	かしこまり(3) かしこまる(7)								
かなし	6	かなしがる(1)								
きらきらし										
きよし	5	きよらさ(1) きよげなり(6) きよらなり(33)								
醜的心象語										
形容詞	数値	付属語								
あいなし	8									
あさまし	31	あさましがる(2) あさましげなり(1)								
あし	42	あしざ(2)								
あぢきなし	8									
あやし	66	あやしがる(2) あやしげなり(1) あやし(1) あやしざ(1)								
いやし	4	いやしげなり(1)								
憂し	8									
おそろし	35	おそろしげなり(2)								
かたはらい たし	10	かたはらいたさ(1)								
きたなし	4	きたなげなり(6)								
くちをし	44	くちをし(1)								

らうらうじ	よろし	よし	ゆかし	めやすし	めでたし	はづかし	はえばえし	なまめかし	つきつきし	たふとし	たのもし	すきすきし
3	18	166	18	3	137	21	3	11	9	15	11	7
		よぎ(2) よげなり(1)	ゆかしがる(4) ゆかし(1)		めでたさ(1)	はづかしげなり(3) はづ(3)		なまめく(2) なまめき(2)		たふとぎ(1) たふとげなり(1)	たのもしげ(1) たのむ(7) たのもしげなり(1)	
わるし	わびし	見苦し	はしたなし	ねたし	にくし	なめし	すさまじ	さわがし	さかし	心もとなし	心づきなし	苦し
14	27	22	6	6	92	6	15	16	5	21	8	12
	わびしげなり(5) わびし(1) わぶ(1)		はしたさな(2)		にくさ(14) にくむ(1) にくげなり(15)	なめげなり(3)	すさまじげなり(1)	さわぎ(2) さわ(2)	さかしがる(1) さかしらなり(2)	心もとなげなり(1)		苦しげなり(1) 苦しげ(4)

上位十位の形容詞と全体の割合

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
よろし	ゆかし	おもしろし	うつくし	はづかし	かしこし	うれし	めでたし	よし	をかし	美的心象語
18	18	19	19	21	32	40	137	166	425	頻度数
2%	2%	2%	2%	2%	3%	4%	13%	16%	42%	割合
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
心もとなし	見苦し	わびし	あさまし	おそろし	わろし	あし	くちをし	あやし	にくし	醜的心象語
21	22	27	31	35	40	42	44	66	92	頻度数
3%	3%	4%	4%	5%	5%	6%	6%	9%	13%	割合

をかし
415
をかしげなり(23)
をかし(1)

わろし
40

(注)

。心象語一一四語(うち美一四六語頻度数一〇二七、醜一六八語頻度数の合計七三五)によるものである。

。美的心象語は、上位十位までの合計で割合は美的心象語の合計の八十八%を占めるのに対し、醜的心象語は五十六%である。

第二節、心象語の対象が示すもの

この五〇語の対象となるものは実に様々である。文芸、風俗、事件、動作、事物、人物、動物、植物、季候、季候、自然、季節など雑多なものであった。ここでは季節(季候)、形状、色彩、階級、衣裳、動物、植物の七項目に分類した。それを表に示したのが次のものである。

美的心象語	季候 (季節)	色彩	形状	階級	衣裳	動物	植物	備考
あたらし		紅	折敷の形	高	衣			調度品が目立つ
ありがたし				高低				
うれし	雪の候			高				病気の快方をさすの が多い
うつくし		(色) 白	ふっくら まるい 小さいもの	高低	薄物	鶏 鶯		児(童)対象が多い
うらやまし				高低		ほととぎす		
うるはし	五月、 十一月	青(緑) 黒	長い	高低	束帯		菖蒲	女性は髪、 男性は束帯に多い
おもしろし				高			桜萩	管弦に対するものが 多い
かしこし				高低		犬	柏木	
かなし				低	袷裳			親子関係が多い
きらきらし		赤	細い	高			ゆず葉	
きよし	一月 二月	青 白	細やか	高	直衣、下 襲、指貫 あこめ		ゆず葉	

	らうらうじ	よろし	よし	ゆかし	めやすし	めでたし	はづかし	はえばえし	なまめかし	つきづきし	たふとし	たのもし	すぎすぎし
一月			夏			候 ら(冬の) 雪、つら			五月	冬			
青	紅	紅			紅	紫			(みどり) 青		(きらきら 輝く) 紅		
長い	小さい	太り、 そり、 太っている	やせてほっ そり、 太っている						姿 細い 勢				
	高低	高	高低	高低	低	高	高	高	高	高低	高低	高	低
狩衣	御衣	冠、 下の襷	うは おそ の柏			半直打 下指、 袴衣、 臂貫			唐衣、 上直 装束、 汗衫、 壺袴				
鶯雁	ほととぎす					牛 馬 鶴							
桐 桜 柳 棟 逢 橘	桜	萱 草				梅 梨 菜 大 藤 花 花 菜 和 桜 蓮 蓮 し こ			葛 柳 蒲 葉 玉			葉、 あすはひ、 あやふ草、 ゆず	
				心 貴人 対して 特に 関									「心」が多い

憂し	いやし	あやし	あぢきなし	あし	あさまし	あいなし	醜的心象語
							季節(季候)
		赤 胡桃色			山吹 紫		色彩
				はまりの 恰好			形状
高低	低	低	低	低	低	低	階級
		狩衣	袴		指貫、 狩衣、 襲		衣裳
		牛			犬 からす		動物
		ゆずり葉 すすき	あすはひの 木				植物
	多い	文字、ことば使用に 関するものが多い ことば文字に対して		気分の対象が多い			備考

							をかし
							二月 三月 四月 五月 七月 八月 十一月 十二月
							白 紫 赤
							ほっそり 葵の葉形
							高低
							直衣 指貫 打衣 汗衫 襲 単衣 赤表 赤衫 緑衫 袍
							鶯 鶯犬 水鳥 鶯、 千鳥 鶯、 鳥 ぬ、 夏かすき 虫
							菖蒲、 楠 さかき の木の 楓、 ねの木の 白樺、 白樺、 葉、 葵、 か、 み、 草、 ば、 かり、 顔、 梅、 蓮、 柏、 す、 ら、 夕、 う、 浅、 な、 か、 お、 た、 だ、 木、 ず、 の

ね た し	に く し	な め し	す さ ま じ	さ わ が し	さ か し	心 も と な し	心 づ き な し	苦 し	く ち を し	き た な し	か た は ら い た し	お そ ろ し
	雨の候		節分	正月				暑い候	雨の候			雷の候
	萌黄 色黒					梨の花の 色	黄ばんだ		薄鈍色			
												大きい形
低	低	低	低	低	低	高低	低	低	高低	低	低	低
							単衣		上衣、袷 打衣			
ほととぎす	うぐいす 蟻はえ、 蚊、蚤		犬						鶯 ほととぎす	なめくじ	海月	みのみし むかで 鶏、馬
花橘 卯の花	柳 かきつばた		梨花		柳	梨花朝顔			夕顔葵 からす			
	ていいるものが目立つ	人の顔か対象となっ ていいるものが目立つ	手紙、ことば使用に 関するものが多い								ことば使用に 関する ものが多い	

はしたなし								
見苦し								
わびし	暑い候	真暗 (髪) 白まだら、 (色)黒	小さい	低い	冠袍 下襲	犬、馬		
わるし			鳥帽子の 恰好	低い	装束	牛、蚊		
わろし	正月			低い	下襲 鳥帽子	うぐいす	桜	

(季節) 冬期に美をみいだしているのが多く夏期には少ない。「人の冠もひしげ、うへのきぬも下襲もひとつになりたるいかにわびしからんと見えたり。夏はされどより」(一二二) のように日頃は、

みずばらしく見えるのも夏の季節には適っているのである。しかし夏期に美をみいだしているのはこの一例にとどまる。美的対象となる季節には、一、二、三、四、五、七、八、九、十、十一、十二月、醜の対象としては、「おそうし」としての雷の候、「くちをし

「にくし」としての雨の候、「くるし」「わびし」としての暑い候がある。また、六月を美と認めていないのは、その暑さ(六月十日にて、あつきこと世にしらぬ程なり一二五)と密接な関係があり、盆地特有の猛暑のためだと思われる。それはくるし、わびしの対象として「暑い候」という所からも推察できようかと思う。尚、冬期に美をみいだしているのが多いのは、雪を愛でる清少納言の好尚のみならず、冬期に多くの行事が行なわれ、清少納言がこれに深

い関心を持っていたためだと思われる。因に、美と認めていない六月の行事は、枕草子中にはみられない。

(色彩) 白、青(緑)、赤(紅) 紫に美をみいだしている。紫や赤は禁色とされた色彩ではなやかさ、あでやかさといった感覚を起こさせ、貴人の色であったところから、「たふとし」「めでたし」と受けとったと思われる。白や青(緑)は、紫や赤の色彩に較べて人に清潔感、純潔感を感じさせるものといえる。それゆえ「きよし」と感じられたのであろう。(形状) 形状は、長いもの、やせて細やかなもの、小さいものに美をみいだし、反対に、太ったもの大きいものに醜を認めている。それは「なまめかしきもの、ほそやかにきよげなる君たちの直衣姿」や「雑色、隨身はすこしやせてほそやかなるぞよさ」や「なにもなにも、小さきものはみなりつくし」等から知ることができる。また「男の目が」金鏡よりならんもおそろし

「や」「(若い男で) いたく肥えたるはいねぶたからんとみゆ」にも

みることが出来る。しかし、これはすべてに通じるのではなく、五三、五八段で述べられるように、雑色、隨身、若い男性などはやせて細やかなのがよく、女性や児や一人前になったような男性は太っているのがよいという原則のものである。これに外れたものに醜をみいだしている。「色くろうにくげなる女の鬢したると鬢がちに、かじけやせやせなる男と夏昼寝したるこそいと見ぐるしけれ」や「やせ色黒き人の生絹の單着たる、いと見ぐるし」の類である。しかし具体的に清少納言は、長いもの、やせて細やかなもの、小さいものに美を感じ、太ったもの、大きいものには醜を認めたようである。

(階級) 階級は、昇殿可能な五位を基準とし以上、以下の高低に分類した。その結果美的対象物では、高一〇、高低(共に含む)一二低三で高い方が多く、醜の対象物では高〇、高低共三、低二と圧倒的に低い階級が多かった。これは、清少納言の美の基準となるものが、貴人に傾倒していることを示す結果だと言っても差し支えないであろう。

(衣裳) 美をみいだしたもので男装では、冠束帯、半臂、下襲、直衣、指貫、狩衣、袈裟などがあり、女装では、裳、唐衣、袴、単衣、壺装束、打衣、裙帯、領布、あこめなどがある。多くが階級に関係があり、従って貴族階級と思われる人の着用したものが多い。醜を感じたのは烏帽子のみでその形に感じたようである。

(動物) 動物では、鶯、ほととぎすをはじめ十八種に美を十六種に醜をみいだしている。また、どちらにも属しているものに、鶯、ほととぎす等十種があった。

これら動物を美と感じさせたものは何か。それは一、視覚的なもの、二、聴覚的なもの、三、習性及び習性への興味、四、詩歌に縁の

ある動物である。

(植物) 植物も数多くのものに美をみいだしている。それぞれのどういう点に美をみいだしたのか、動物の場合と多少類似しているが一、植物の名称に興味あるもの、二、視覚的な美を持つもの、三、年中行事に使用するもの、四、詩歌故事に縁のあるものである。

以上述べた動植物に限らず、類從的章段でも、清少納言が美をみいだす基準となるもの一年中行事に使用されるもの、詩歌故事に縁があるもの一は、彼女独自の美意識といえるもので、それが同時に宮廷貴族を信仰し、中宮の書物に通じ博学で機知と諧謔を感じる好尚に適っていたものであると考えることができる。

第三節 かきつばた試論(略)

第四節 清少納言の美を形成するもの

以上、清少納言の美意識、醜意識について論じてきた。では、彼女のこのような美意識を形成し支えている基盤となるものは何であったか。清少納言の美意識は、彼女が仕えていた後宮社会と深いかわりを持っていた。結論的に言えば、清少納言の美意識は、彼女の仕えていた中宮定子後宮、その他の後見である中関白家の人々によって造成された風儀こそが、その世俗的なそしてより精神的な支盤であった。では、定子後宮、中関白家の風儀とは、どのような独特な美意識をつちかうものであったか。そこで美的価値であり、どこに美的基準が置かれていたのかと言えば、貴族社会を越えてそこには強く独自のものがあつた。知識的な諧謔と機才を愛する明朗で開放的なその社交的な雰囲気は道隆の野放図な猿樂的氣質とその妻

で、定子や伊周の母高階貴子、この開放的なこの家刀自の気性とこの両面からつちかわれたものと説明されるものである。清少納言は、こうした定子後宮、中関白家につちかわれた美意識に同化したものだと考えられる。これは、かの紫式部との姿勢の大きな違いである。紫式部は日記において自己の仕える中宮彰子の道長家の盛栄を讃頌しながら、その讃頌の筆先はおのずから立ち返ってその世界に同化しえない我身を知っている。讃頌しなければならぬ絶対的な権勢といえども、所詮、それは自己と作用被作用の相関関係でとらえているのである。ところが清少納言の場合は、それにひたすな領取されてしまう。全面的に領取されることに、独自の美意識の核を置くのである。

三、結び

以上枕草子における清少納言の美意識について述べてきたが、清少納言にとって、枕草子の美はいかなる存在であったろうか。

清少約言の美の発見は、彼女の生来の性質であると共に、その裏には、彼女なりの意識された志向がはたらいていると見なければなるまい。たとえば二七七段において、彼女は自ら中宮に「世の中、腹立たしう、むつかしう、片時あるべき心地もせで、ただいづちもいづちも行きもしなばやと思ふに、ただの紙のいと白うきよげなるに、よき筆、白き色紙みちのくに紙など得つれば、こよなうなぐさみて、さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめりとなむおぼゆ。(中略)なほこの世は、さらにさらにえ思ひ捨つまじと命さへ惜しくなむなる」と話している。日常生活におけるささやかな美の発見は、清少納言にとっては、中関白家の衰退や中官の境遇な

どの不愉快な現実に対して、生きてゆく力を与えてくれたのである。だから清少納言の美の探求は、単に与えられた周囲を細かく見渡すなどという自然発生的な受身のものではない。むしろ、そこには彼女自身の意識的な発見への努力ともいべき積極的、能動的な美への接近のしかたがみられる。露が葉末からこぼれ落ちるのを、萩の枝はわずかに上の方に返る。ああおもしろい。しかし、人の心には「つゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ」という二重のおもしろさが、彼女をとらえる。また、八月の末に、太秦の広隆寺のお詣りの途中で見た稲刈は、宮廷の貴族的なものとは異なる興味を持ち、「穂をうち敷きて並みをもをかし。庵のさまなど」というのは、彼女の能動的な美の発見態度を語るものである。

中関白家の悲運の中で、定子の身辺に奉仕した彼女が、その言語に絶する悲涙を少しも注がず、尚中宮の許で奉仕する時勝気な彼女は消極的に生きることをせず、主家の繁栄を語るのと変ることなく、明朗さを保持する。そして日常生活でのささやかな美の発見は、清少納言にとって、苦しい人生に耐えて生きてゆく、現実の力を与えてくれたのであり、現実の悲運に抵抗するかのようになかには、詩を発見しようとする彼女の積極的な心の動きがあったと考えるべきであろう。

枕草子は、中関白家や中宮定子の頌詞のために書かれたが、清少納言の「われほめ」の意味だけでなく、彼女にとっての美の発見の意味を考える時、自己の持つ文芸の才をもって、自分の生活のよりどころにするために書かれたように考えられる。

四、参考文献(略)